

## ケニア滞在報告

萌芽的・学際的新展開グループ 植木尚子

2011年9月に着任した直後から、この研究所がケニアとの交流に力を入れているということは聞いていたのですが、私自身、ケニアの農業に直結するような研究をしているわけではなく、また、年度初めに参加の意思を聞かれたときには、必要ならば行きます、というようなお返事をさせていただきましたので、実際に訪問が本決まりになっても、あまり実感がありませんでした。訪問に先立って、なにからなにまで坂本先生にすべてお膳立てしていただいて、現地では坂本先生と久保先生の後をついて歩いた訪問で、発表の資料だけをそろえて、あとは気軽に訪れた、というのが正直なところですが、両先生には、本当にお世話になりました。

滞在中は、JSPSとJICAのケニア・ナイロビ拠点を訪問して、ケニアにおける国際協力の実際についてのお話を伺ったほか、ジョモケニアッタ農工大学(JKUAT)を訪問し、大学学長・副学長と面談ののち、農学部の施設・圃場を見学させていただきました。その後、本訪問の目的の中心である、同大学で開かれたThe Seventh JKUAT Scientific, Technological and Industrialization Conferenceに出席いたしました。訪問の内容としては、現地でのサイエンスを通じた国際協力の実際を視察する、というものでしたが、いろいろな意味で非常に勉強になり、考えさせられる滞在でした。

ナイロビ市内をみて、一番強烈に印象に残ったのは公共事業で整備されるべきインフラ



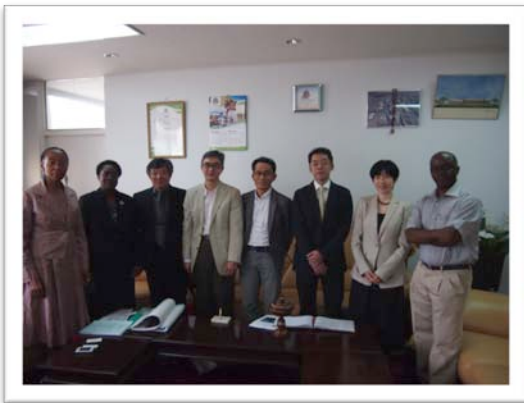
がまだまだ完成されていないという点でした。ビルの高層階から見渡すと、ナイロビ中心部は幅広い幹線道路に緑が多く、青い空とも相まって非常に美しい眺めです。しかし、実際にその道路を走ってみると、中心部を外れるとまったく舗装がされていない車道もあり、また、車は時速80キロ近くで飛ばしていくような幹線道路沿いを延々と歩く人々の姿が見られました。ちょうど通勤時間に当たると思われる時刻だったのですが、これは、バスや電車などの公共交通網が完成されていないことからくるものでしょう。

そのような印象を得た後で訪問したJSPS、JICA、JKUATのどこでも話題に上ったのが、ケニアへの中国の進出でした。歴史的に見れば、日本はケニアに多大な貢献をしてきたわけですが（その一端を、その後JKUATの農学部を見学した際に実際に目にすることになるのですが）、現在は中国がケニアの経済発展、特に土木事業を強力にサポートしているとのことでした。これは、中国が資金源となって事業をサポートするというだけではなく、中国企業がケニア政府が行う公共事業を請け負って工事を行っているという意味も含んでおり、この点で日本企業は大きく出遅れているとのことでした。実際、地元の人は、たとえば幹線道路の整備に中国が資金を出した場合と、中国企業が事業を請け負った場合の区別はつけず（つかず）に、「China built this road」という表現を使っており、お金の出所、というだけではなく、中国という国へのケニアの「馴染みぶり」がうかがえました。ナイロビから伸びている幹線道路は、いかにも新しく見えたものが多く、きれいに舗装されて快適に移動できたのですが、そこから伸びている細い道は、補修がされておらず穴ぼこだらけの道や、あるいはまったく舗装されていない赤土のままのところが多くみられ、ケニアという国にはまだまだなされるべき土木建設業が多くあり、つまりは、今後も当然続く

日本と中国の間の「存在感競争」で、中国に水をあけられてしまう余地がたくさん残されているのだ、ともいえるでしょう。

また、当然ながら中国企業の能率的な事業運営が地元の非能率的な経営に刺激を与えており、これはケニアにとって歓迎すべき点であると捉えられているようです。私どもの滞在の間にも、ケニアという国は非常に「のんびり」しており、予定時刻通りに行動するという観念が大変に薄いという印象を受けました。わたくしたちが出席した JKUAT での会議も、予定時刻に一時間以上遅れて開会され、また、セッションによっては予定されていたスピーカーの半分以上が現れなかったというような場合も見られ（しかし、イギリス領時代に確立されたお茶の時間は大切にまもられている）、どうも「ビジネス」という概念と相いれない雰囲気が常に漂っているのですが、中国企業の迅速な事業運営が、このようなケニアの文化を変えていくきっかけとしてポジティブに受け入れられているようです。このような側面にくわえて、中国は存在感をアピールすることにもたけており、従来から援助をおこなっていたはずの日本の存在感がどんどん薄まっていく、というのは、JICA/JSPPS の共通した危機感として感じられました。

さて、今回のケニア訪問の中心的目的である JKUAT 7<sup>th</sup> Conference に参加するに先立ち、JKUAT の学長室を表敬訪問し、そののちに農学部を見学させていただきました。農学部は



広大な実験圃場を有し、さまざまな作物の育種・栽培実験が行われていました。この実験圃場のうち、とくに実験水田は去年から JICA の協力で完成し、すでに栽培がおこなわれているということで、近年ケニアにおける農業で重要性を増している水稻栽培に役立つ品種を開発しようという強い意気込みを感じました。圃場見学の後、農学部の実験設備を見学させていただきましたが、20 年近く前に JICA の協力で導入された実験機器が、しっかりしたメンテナンスの下に今でも大いに役に立っているのを目にしました。大学スタッフの不断の努力はもちろんです、最近の科学研究機器メーカーならばどこでも出している、その機器本来の目的以外の部分…タッチパネル、カラー液晶ディスプレイなどなどがひどくしゃれてできており、そのような「小洒落た、しかしなくてもよい付属品」部分が壊れただけでお払い箱になってしまいがちな測定機材などでは不可能な使い方だと思えました（個人的好みに多分に影響された感想ではありますが…）。ざっと見回した限りでは、大

型実験機材の7割程度は JICA のステッカーが貼られていたという印象で、確かに日本が JKUAT の発展に果たした貢献は多大ということがよくわかりました。

さて、滞在4日目朝から始まった学会ですが、これは、JKUAT が開催する学術会議、ということで、テーマは多岐にわたり、たとえば治水のための政策モデル・橋梁設計にこのような流体力学モデリングから、農芸化学的内容の、たとえば土壌・水圏からの微生物単離や交配育種まで、実に様々なトピックのトークが見られ、トピック別の学会を国内で行って、十分に意味深いものにするのが未だ難しい時期にある、という印象を受けました。

私にとって一番理解しやすい農芸化学系の発表を聞いていて、多くの若い研究者が熱意をもって研究を行っている様子に強い印象を受けました。ただ、発表の多くが特殊環境からの微生物の単離と同定についてで、そこからそれぞれの微生物が有する興味深い特性についての分子レベルの研究までは進んでいない様子が見てとれました。この訪問に先立って、坂本先生から「JKUAT の上層部は『応用研究』『実用研究』の必要を声高に訴えているが、それらを行うのに本当に必要な基礎学問の重要性を忘れがちだ」と教えていただいたのですが、やはり、もう少し踏み込んだ分子生物学的なものの見方をする土壌を基礎から作るべきなのでは、という気がいたしました。私自身の研究テーマは、この研究所のミッションである「農学」というものから、かなり「理学」に触れた方向を向いたものなのですが、この私自身の方向性を生かして、将来 JKUAT と当研究所間の学術交流において何らかのお手伝いができるかもしれませんうれしく思います。

これとは別に、政府要人によるオープニングの挨拶など、ケニアの科学行政の方向を決めると思われる人々の言葉の端々で印象に残ったのが、「知的財産権」という概念の欠如です。たとえば、ケニア人研究者がヨーロッパでポスドクとしてその確立にかかわった、あるトマトの栽培種について、「〇〇博士がポスドクとしてその栽培種を確立したのに、それをほかの人が勝手に製品化してしまっ、ケニアはその品種を用いるのに権利金を支払わなければならない」という説明の仕方をしていました。しかし、当然ながら、ある研究者がある研究機関での研究に基づいて品種が確立された場合、その品種に関する知的財産権の多くの部分はその研究機関に帰されるのが常識であるわけで、このような点でもケニアでの研究開発はいろいろな面で他国から取り入れるべきものや擦り合わせるべき点があるという印象でした。

到着した翌日朝からいろいろな方とお会いした後に、終日会議に参加し、おかげでケニアでの教育・研究の実際を実感させていただき、大変有意義な滞在でした。土産話は、ついつい野生動物と食事と、人々と・・・に偏ってしまいがちですが、実際のところ、結構しっかり働いたんですよ。

## 付記

いわゆる開発途上国を訪ねる場合に、私が一番心配になるのは治安・衛生（とくに水道水の水質）なのですが、まず、治安については、今回の訪問では一人で出歩くような機会はなかったので、何とも言えません。ただ、ケニア市の郊外を車で走った際に、ところによって写真のような地域もあり、例えばこういう場所を一人で歩く度胸はないなあ（必要もないけれど）・・・と思いました。ただ、JKUAT の山形大学サテライトオフィスに滞在していらっしゃる大崎先生によると、ケニア市内や JKUAT 周辺は夜遅くでも危ないことはない、ということでした。度胸があれば **Enjoy at your own risk** といったところでしょうか。衛生といえば、水道水は、飲料には適さないということで、飲料水はミネラルウォーターが用意されていました。たしかに、シャワーから出るお湯を流し始めて数十秒は茶色がかかったお湯が出たりもしました。ただ、歯を磨いて口をゆすぐぐらいであれば、水道水をつかっても、私の場合にはとくに問題もなかったようです。食事をするときにも、生野菜のサラダなども出されましたが、問題なくいただきました。

時間にはおおらか（ルーズ）で、仕事の効率も高いとは言えない、のはほんとうです。ただ、私個人としては、学会が時間通りに始まらなかった点を除いては、特に目をむいて驚くほどではないような気がしました（アメリカでもそういうところが多分にあったので・・・）。むしろ、学生さんたちの礼儀正しさや、地元の方々の人当たりの柔らかさが、私にとっては印象的でした。ただ、JKUAT で滞在した African Institute of Capability Development の宿舎で、滞在しているのが私たちのみ5名のところを、総勢11名の職員が厨房で朝食を準備してサーブしていたというのは、非常に面白いことでした。いわゆる「公務員」的なステータスの職員なのかもしれませんが、事業仕分けを経験した国の大学職員と

して見ていると、合理化・能率化といろいろとできることがありそうな気はいたしました。

滞在時期は、ちょうど雨季の終わりにあたり、夕食をいただいた **Blue Post Hotel** の敷地内にある滝もずいぶん水量があったようです。標高 1800 メートルの地点にある大学構内でも色鮮やかな花が咲き、朝晩は多少冷える割には、色彩は熱帯的でした。

これまでにケニア訪問をした他所員の感想を読んでは楽しませていただいておりますが、やはり、百聞は一見にしかず、このような機会をいただいて有意義な経験をさせていただきました。

